

資料館だより

第 64 号

2009.9.30

特別展予告

増上寺徳川家霊廟



徳川家霊廟天井板絵(増上寺蔵)

昭和35年（1960）1月、1年半にわたって増上寺徳川家墓所で実施されていた現地調査が終わりました。この墓所改葬に伴う調査は、江戸時代に武家社会の頂点にあった同家の葬制・墓制の一端を明らかにしました。その成果は、今日においても歴史研究の中で重要な位置を占めています。

徳川將軍家の江戸の墓所は、芝増上寺（港区）と上野寛永寺（台東区）に造営されました。中でも、2代秀忠、及び4代家綱から7代家継までの墓所は、埋葬所と参拝所とからなる霊廟として整備されました。

これら霊廟の結構は、同時代の有力大名の墓所を遥かに凌ぐ壮大な規模をもち、建築には当時の最高度の技術が採用されました。ことに江戸で最初の將軍墓となった2代秀忠—台徳院—

の霊廟は、日光輪王寺の3代家光—大猷院—霊廟造営の際に、範となったと言われるほど壮麗かつ荘厳であったとされています。

しかし、昭和20年（1945）第二次世界大戦末期の空襲によって霊廟は甚大な被害を受けて、霊廟を形作っていた多くの文化財が烏有に帰しました。

本特別展では、増上寺に造営された3人の將軍—秀忠・家宣・家継—の霊廟を取り上げ、造営の経緯や経過、境内の様子、造営後の運営のあり方に関わる問題に迫ります。また、將軍の葬儀や法要の様子を垣間見ながら、徳川家霊廟がもつ歴史的意味について考えます。

会 期：平成21年10月25日（日）

～11月29日（日）

会 場：港区立港郷土資料館

もう一つの葵三代

—台徳院霊廟跡地出土遺物より—

高山 優
(学芸員)

かつて、都内のとある博物館で、300年近く続いた江戸時代の礎を築いた初代から3代までの將軍の足跡をたどる特別展が行われました。そのタイトルは『葵三代』。

この3人の將軍のうち、初代徳川家康と3代徳川家光は死後、日光に葬られました。厳密に言えば、共に他所に埋葬された後、日光に造営された霊廟に改葬されたのです。

3代家光は、輪王寺に造営された霊廟に葬られますが、この家光—大猷院—^{だいゆう}霊廟の基となつたとされる霊廟が、2代徳川秀忠—台徳院—の霊廟です。それは、芝増上寺に寛永9年(1632)から翌10年(1633)にかけて築造されました。

台徳院霊廟は、時の最有力者である土井利勝を総奉行に迎え、3代家光と幕府の威信をかけた大事業として江戸に初めて造った將軍墓でした。

造営当初の様子は、国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸図屏風」からうかがい知ることができます。霊廟の入り口には惣門があり、これをくぐって直進すると勅額門に至ります。さらにその奥にある中門の向こうに^{たまや}霊屋が築造され、霊屋横手の天人門から先が奥院となります。埋葬施設は、この奥院部分に設けられました。

ところで、台徳院霊廟は昭和20年(1945)の空襲、同33年(1958)の改葬によって、当時の面影は姿を消しました。

平成11年(1999)、現在の惣門の裏手で江戸時代に構築された石組水路の一部が検出されました。これにより、霊廟の一部が残存していることが確認され、本格的な発掘調査が平成13年(2001)に実施されました。

この調査では、石組水路や灯籠基礎、木材などを処理したごみ穴などと共に、徳川家の家紋

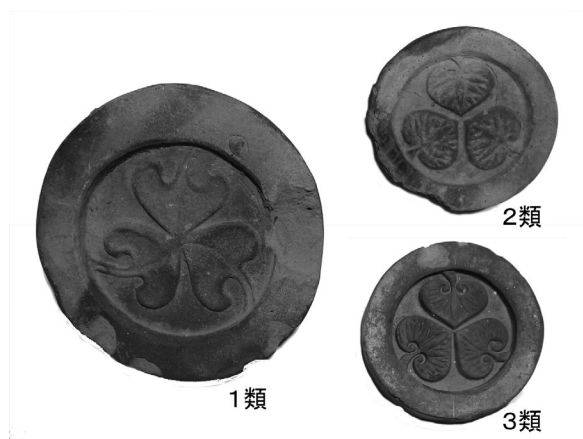
である三つ葉葵紋付きの瓦が、複数出土しました。

出土した瓦は、調査位置から判断して、台徳院霊廟の惣門や塀に用いられたものと推測されます。そのうち、家紋は^{のきまるがわら}軒丸瓦もしくは^{のきさんがわら}軒棧瓦に見られます。

これらの葵紋をつぶさに観察した結果、葵には3つの型があることが判明しました。葵紋は、もともと水生植物の布袋葵の葉を図案化したものですが、瓦に付けられた葵には、より写実的なもの(1類)、図案化が進んだもの(3類)、その中間的な特徴をもつもの(2類)、の3種があることが確認されました。

残念ながら、遺跡から3種の瓦が混在して出土していること、出土遺構の重複関係から瓦の新旧を分別することが困難であったことなどから、3種の瓦の関係を特定することには慎重にならざるを得ません。しかし、家紋付き瓦それぞれの^{しょうせい}焼成具合や^{たいど}胎土の特徴、葵紋自体の様式的な特徴などから、1類・2類・3類の順に変化したと考えています。

ここに、もう一つの「葵(紋)」三代が見られるのです。



葵紋付瓦(港区教育委員会蔵)

港区名所案内

藪 小 路

平田 秀勝
(文化財保護調査員)

江戸時代の切絵図などを眺めてみると、新橋・虎御門外・愛宕下界限には、

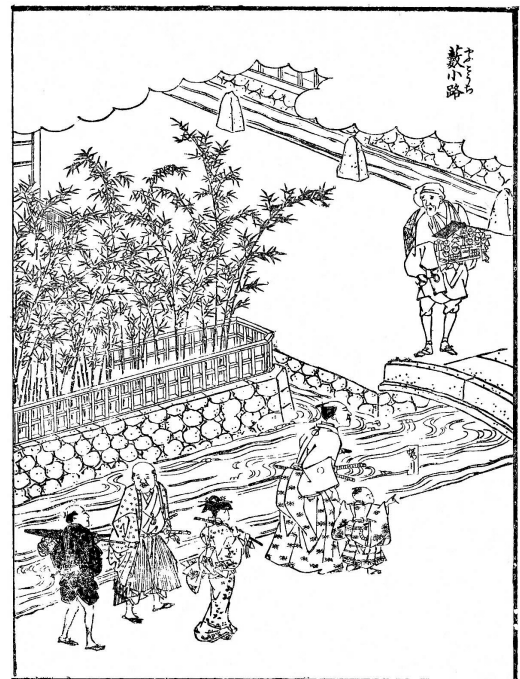
稲荷小路、愛宕下大名小路、佐久間小路、
田村小路（神保小路・小身小路）、
薬師小路、秋田小路、袋小路、鎧小路、
三斎小路、藪小路

と、「〇〇小路」と呼ばれる道が多く見られます。これらのうち、特に藪小路は、さまざまな地誌にその名が記され、『江戸名所図会』や初代広重の『名所江戸百景』にも描かれる江戸名所として広く知られていました。

藪小路は、現在の虎ノ門一丁目2、10～12、14・15番と虎ノ門一丁目16・17番、同二丁目3～5番の間、西新橋交番前から虎の門病院方面へと向かう道にあたります。道の南東側には慶長（1596－1615）の頃より細川三斎（忠興）の屋敷が置かれ、桜川に面する屋敷の北東に20間（約40m）あまりの竹藪が茂っていたそうです。

『紫の一本』や『御府内備考』など地誌には、藪小路の由来として、細川丹後守行孝（三斎の孫。肥後宇土藩主）邸内北東隅に小さな竹藪があり、この中で御秘蔵の御鷹が死んだため、それ以後、竹を切らず、そのまま残したとも、屋敷の金神（方位神。殺伐を好み、金神の方角は大凶とされる）というので、むかし、この所に竹を植え、「藪金神」と唱えていたものが、いつの頃からかなまって「藪小路」となり、地名のようになったという説を載せています。また、北東は鬼門の方角にあたるため、そこには屋敷を建てず、空地として竹を植えたという説もあります。細川家の屋敷は、正徳4年（1714）から近江水口藩加藤家の屋敷となりますが、竹藪はそのまま残されたため、加藤家屋敷は俗に「藪加藤」と称されました。

現在では、ビルが建ち並ぶオフィス街の一角で、竹藪はもちろん、桜川も暗渠化されて、当時を思い起こすようなものではありません。『新撰東京名所図会』によると、維新後も「藪加藤」の屋敷は残っていたものの、現在の愛宕下通りに面していることから、一部が住宅や商店となり、いつしか藪も刈り取られ、明治の末には、既に藪小路の面影は失われていたそうです。



藪小路（『江戸名所図会』より）

図中央から左手に描かれているのが「藪加藤」の竹藪。手前の道は愛宕下通りで、脇を桜川が流れる。桜川に架かるのは北桜橋。北桜橋より図左上へ向かう道が藪小路である。

今回紹介した「藪小路」をはじめ、新橋から愛宕、虎ノ門、芝公園、浜松町、海岸界限の地理・歴史を集録した『増補港区近代沿革図集 新橋・愛宕・虎ノ門・芝公園・芝大門・浜松町・海岸』が刊行されました。本館並びにみなと図書館、港区役所3階区政資料室、各支所で頒布（頒布価格1,700円）しております。

写楽に勝った!?

港区ゆかりの浮世絵師 初代歌川豊国

小澤 絵理子
(文化財保護調査員)

「歌川派」は、江戸時代の末期頃には「歌川にあらざれば浮世絵師にあらず」とまで言われるほど隆盛を極めた画派です。さてこの歌川派、港区とは切っても切れない縁があったのをご存知でしょうか。まず「歌川」という画姓ですが、始祖である豊春^{とよはる}が一時芝三島町(現 芝大門一丁目の辺り)に住んでおり、隣接した地域であった「宇田川町」からとったものだといわれています。そして歌川派が江戸の浮世絵界を席捲する一大画派となる上で最も重要な役割を果たしたと言っても過言ではない、初代歌川豊国も港区とゆかりの深い人物でした。

初代豊国(俗称熊吉)は、明和6年(1769)に、木彫人形師倉橋五郎兵衛の子として芝三島町に生まれました。天明(1781-89)前期頃、豊春に弟子入りし、天明6年(1786)頃から作品が世に出るようになりました。はじめのうちは黄表紙の挿絵や小さい判型の錦絵などを描き、次第に実力が認められ、大判の美人絵、師の得意としていた浮絵^{うきえ}、そして役者の似顔絵で頭角を現しました。



役者舞台之姿絵 かうらいや(当館蔵)

1801) 初期頃から彼の作品を版行していた芝神明前の版元、和泉屋市兵衛が出版しました。

豊国の出世作となったのは、寛政6年(1794)に始まる「役者舞台之姿絵」という人気歌舞伎役者の舞台姿を描いたシリーズもので、現在に至るまで44点が確認されています。豊国がまだ新進の絵師であった寛政(1789-

ちょうど、この年(寛政6年)5月に、日本橋の大手版元蔦屋重三郎から東洲斎写楽の豪華な役者大首絵の28枚揃いが刊行され、評判になりました。しかし、大田南畝著といわれる『浮世絵類考』の中で「あまり真を画かんとしてあらぬさまにかきなせし故、長く世に行われず」〔注1〕と評されたように、例えば、鉤鼻^{かぎばな}をさらに目立たせたり、美貌で名高い女形役者であっても容赦なく老化の様子を描き出すというように、役者の容貌の中で強く印象に残る部分をさらに強調するという手法で似顔絵を描きました。現代では個性的な美術作品として高い評価を得ていますが、江戸時代の人々にとって役者絵はブロマイドやグラビアのようなものでしたので、いかに似ているとはいえ、自分の鼻^{ひいき}真にする役者がその欠点を強調されているような絵は好まれなかったということでしょう。

対する豊国は、役者の外見上の特徴をつかみつつも、ファンの思い描く理想像を投影した華のある美しい姿に仕上げるという作風で世に受け入れられました。役者絵を先導する絵師として一世を風靡し、歌川派の役者絵の様式を確立します。また美人絵や絵本、草双紙の挿絵でも時代の要求に応えた作品を次々と発表しました。さらに、国貞^{くにさだ}、国芳^{くによし}を筆頭に多くのすぐれた弟子を育てあげ、「大歌川派」の礎を作ったのです。

文政8年(1825)正月7日、豊国は大勢の弟子たちに囲まれて57歳でその生涯を閉じ、三田聖坂にあった功運寺(現在は中野区に移転)に葬られました。没後の文政11年(1828)に建立された筆塚〔注2〕には86名の弟子・孫弟子が名を連ねたといひます。

〔注1〕 写楽の浮世絵師としての活動期間は寛政6～7年にかけての10ヶ月ほど。ただし寛政6年のうちに作画されており、7年にはすでに活動していなかったという説もある。

〔注2〕 現存せず。

本村町貝塚

山根 洋子
(文化財保護調査員)

東京湾に面する港区では伊皿子貝塚をはじめ、縄文時代の貝塚が8ヶ所確認されており、豊富な海の幸を昔から人々が利用していたことを窺えます。

本村町貝塚（港区南麻布三丁目）は赤坂・飯倉・麻布台地の南端に位置する縄文時代前期（今から約6千年前）の貝塚ですが、この場所は現在の海岸線からはかなり遠く、埋め立てが行われる前の旧海岸線からでも最短で1.4km程の距離があります。なぜ、海から離れた場所に貝塚が？と思われるかも知れませんが、貝塚が形成された縄文時代の前期は年平均気温が現在と比べて1～2℃高かったため、海面が上昇して現在の標高5m辺りまで海水が入り込んでいたのです。これを縄文海進といい、最も海進が進んだ時には栃木県藤岡町の辺りにまで海水が到達するほどでした。この海進のため、本村町貝塚が形成された頃は貝塚東側の低地が入り江になっていたと推測され、この付近でも貝が採集できたと考えられます。

さて、この本村町貝塚は戦前より知られ、従来港区の代表的な遺跡として挙げられています。貝塚の存在は、昭和11年（1936）に『ミネルヴァ』誌上で簡単に紹介された後、昭和13年（1938）には慶応義塾大学の江坂輝彌氏による発掘調査が行われました。その結果、表土から30～40cm下に貝層が20～30cm堆積していることがわかりました。貝はハマグリ・アサリ・オオノガイ・オキシジミ・カガミガイ・サルボウ・シオフキ・ハイガイ・アカガイ・マガキ・イタボガキ・マテガイ・アカニシ・キサゴ・ツメタガイ・バイ・アラムシロの17種が確認され、このうち二枚貝ではハマグリ・サルボウ・オキシジミ・シオフキ・ハイガイ、巻貝ではアカニシ・ツメタガイが比較的多く発見されています。貝層中からは

他に、種不明の魚骨が少しと諸磯式土器を主体とした縄文時代前期の土器が出土しました。

そして、昭和38年（1963）には慶応義塾大学教授（当時）清水潤三氏が江坂氏の調査地点よりやや北側一段上の崖端部に貝層が残存していることを確認し、貝塚の主要部はこの地点であることを指摘しています。

しかし、月日が流れるにつれ貝塚の存否自体が疑問視されるようになったため、確認調査を行うことになりました。調査は平成21年（2009）3月に江坂氏の調査地点よりやや東側、清水氏が確認した貝塚主要部より南側の斜面に1.5×3mほどのトレンチを2ヶ所、1×1m程のトレンチを1ヶ所設定し進められました。調査の結果、ハマグリ・シオフキ・サルボウ・アサリ・オオノガイ・オキシジミ・ハイガイ・ツメタガイなどの貝が集中して検出されましたが、残念ながら後世に攪乱を受けており、縄文時代に形成された貝層ではありませんでした。但し、確認した貝種は江坂氏の報告にあるものと大きな相違はなく、さらには現在では有明海以南の暖かい水域にしか生息しないハイガイが数多く発見されたことから、これらの貝は縄文時代の貝塚が何らかの事情で掘り返された後に再堆積したものと考えられます。また、縄文時代前期の土器、アカガイ製の貝輪、ハマグリ製の貝刃など、縄文時代の道具も見つかっており、この近辺に当時のゴミ捨て場である貝塚が存在したことは明らかです。

今回の調査では、縄文時代に堆積したままの状態では貝が検出されず、その実態は謎に包まれたままとなりましたが、都会の片隅に6千年前の人々の暮らしの跡が眠る可能性は未だ残っています。いつの日かその姿が皆さんの目に触れることがあるかもしれません。

「都電一港区の路面電車」

大坪 潤子
(文化財保護調査員)

かつて港区を走っていた路面電車、都電。

今回のコーナー展では、その歴史に関わる資料をご紹介します(10月10日まで)。ここでは、終了した前期分を含め概史をたどります。

都電の歴史は、明治15年(1882)の東京馬車鉄道開通(新橋―日本橋)にさかのぼります。明治5年に開通した蒸気機関車の鉄道が都市と都市を結んだのに対し、馬車鉄道は都市(東京)の内部を走る身近な乗り物であり、軌道(レール)上の客車を馬が牽くので、通常の馬車に比べて乗り心地や速度も格段に優れていました。しかし馬の餌や糞尿、臭いの問題が避けられず、東京市民の評判はあまり良くありませんでした。

明治36年(1903)、東京馬車鉄道会社は、馬に代わって電気の力で路面の軌道を走る「東京電車鉄道」を開通させます(新橋―品川八ツ山橋)。東京における路面電車の始まりです。馬車鉄道に続き、港区を走り抜ける路線が第一号でした。この後民間会社三社が路面電車を経営して東京市内に路線が張りめぐらされ、合併の後明治44年に東京市が買収。「市電」が誕生します。

そして昭和18年(1943)の都制施行で東京市が東京都になったのに伴い、市電も「都電」に名前が変わりました。都電は戦災で多くの車両が焼失しましたが、戦後は車体を鋼鉄化しつつ復興、昭和30年代はじめには最盛期を迎えます。

この頃の運転系統は41、路線は計200km以上に及び、年間の乗客数は5億人を超えました。港区を走ったのはそのうち13の系統です(車両引き込み線や始点のみが港区内の路線を除く)。最古参の品川駅前―上野駅前(1系統)は日中6分間隔で運行し、管轄の三田車庫(現 三田五丁目の都営アパート)は80台の車両を抱えていました。街中を走る都電は生活に密着し、乗務員と乗客も親しく接していたといえます。

しかし、高度経済成長を背景に乗用車利用が急増して路面が渋滞し、地下鉄路線の伸長もあって、都電の乗客数は次第に減っていきます。

昭和34年(1959)、渋滞緩和のために都電軌道内への乗用車進入が制限付で認められました。ところが制限は守られず、逆に都電も交通渋滞に巻き込まれて遅延が多発。乗客が乗用車や地下鉄の利用に流れるという悪循環が生じました。

この結果、東京都は昭和38年から都電の廃止を開始します。路線ごとに順次短縮や廃止がおこなわれ、昭和47年、今も走る荒川線(三輪―早稲田。27・32系統を一本化)を残し、都電は東京の街から姿を消しました。港区内の路線は、昭和42年から44年にかけて廃止されました。三田車庫には不要になった車両の大部分が集められ、炎を浴びて解体される様子は当時の人々に強烈な印象を与えたそうです。

さて、かつて都電が走ったおもかげを伝えるものが、区内にあります。都電の車両工場(現 芝浦アイランド)へ渡る船路橋は平成19年(2007)に架け替えられましたが、専用引き込み線が通っていたことを表すデザインになっています。また、新橋駅東口には架線柱が信号機用に残り、新橋から虎ノ門にかけては停留所の位置を示す案内板が残っています。他にも、軌道の敷石がご家庭で踏石として利用されるなど、意外なところで姿を留めているようです。

コーナー展では、準備段階で生涯学習センター「語り部の会」の皆様からお話をうかがい、ご来場者からアンケートにて都電に関するエピソードをお寄せいただきました。ここでは逐一ご紹介出来ませんが、都電の記憶が姿だけでなく音や色を伴って鮮やかであることが印象的でした。ご協力に心から御礼申し上げます。

事業報告ピックアップ

見て・さわって・学ぼう！

～夏休み事業報告～

《夏休み体験ミュージアム》

チャレンジ！

縄文時代のアクセサリーを作ろう

夏休み体験ミュージアムは今年で4回目を迎えました。今回も東京都埋蔵文化財センターから講師を迎え、縄文時代の耳飾りである**けつ**状耳飾りの制作体験を行いました。

定員 30 名のところ 51 名の応募があり、抽選で当選した 29 名の参加者と 20 名の保護者が集まり、耳飾り作りに挑戦しました。

塊状耳飾りは、直径数センチの平たい円形の石で、中央に穴があき一箇所に切れ目の入った形をしています。円形以外に逆三角形のような形もあり、耳たぶに穴をあけて切れ目から穴に差し込んで使ったと思われます。



耳飾り作りの様子

制作体験では、加工しやすい滑石を素材にしてサンドペーパーなどで形を作り、ペンダントとして仕上げました。

参加者は耳飾りを作りながら、自然の石が持つ質感や色を確かめたり、昔の人々の暮らしやモノづくりに思いをめぐらせていました。

また参加したい、という声も聞こえ、楽しい夏休みの思い出になったようです。

(文化財保護調査員 杉本 絵美)



制作した塊状耳飾り

《夏休み学習会》

ノリと海苔

～「のり」のこと、もっとよく知る2日間！～

東京海洋大学附属水産資料館との連携事業として実施している夏休み学習会も5回目を向かえ、今回は港区ミュージアムネットワーク事業の一環として港区地域振興課が実施する「夏休み子どもワークショップ」参加事業として開催しました。

今年は私たちの毎日の暮らしになじみの深い海苔をテーマに、小学校4年生から中学校1年生までの児童・生徒とその保護者を対象として8月19・20日に行いました。

初日は、東京海洋大学附属水産資料館で生物としてのノリについて学習しました。ノリを含めた海藻の生態やたくさんあるノリの仲間の内、食用としているノリは1種類であることなどを学習し、最後に恒例となった海藻のしおり作りを行いました。



ベカ船の
ペーパークラフト

翌日は、当館で大田区立郷土博物館北村敏学芸員を講師として、東京の代表的な名産品である海苔の養殖の歴史を学び、海苔養殖に使った「ベカ船」のペーパークラフトを製作しました。水産資料館に展示されていた「ベカ船」を前日見学していたため、ペーパークラフトの製作も手際よくすることができ、参加者全員が完成させることができました。

2日間とも子どもたちばかりではなく、保護者の皆さんも真剣なまなざしで学習している姿が印象的でした。今後も海をテーマに連携事業を開催していく予定です。

(学芸員 松本 健)

事業予定 (平成21年10月～)

特別展 増上寺徳川家霊廟

会期 10月25日(日)～11月29日(日)
 会場 港区立港郷土資料館 <入場無料>
 開館時間 9:00～17:00
 (会期中の毎週火・金曜日は19:30まで)
 ※ただし11月3日・24日を除く
 休館日 11月2日・9日・16日(月)、
 11月19日(木)、11月24日(火)

◆資料館講座 「増上寺徳川家霊廟の世界」◆
 日程 11月6日・13日・20日・27日(金)
 時間 18:00～19:30
 会場 三田図書館3階 集会室 ※要事前申込
 ◆展示解説◆
 日時 11月3日・23日(祝) 14:00～15:00
 展示室にて自由参加(事前申込不要)

コーナー展

「都電—港区の路面電車」 開 催 中～10月10日(土)
 「大名家の膳具」 12月12日(土)～1月20日(水)
 「指定文化財展」 1月22日(金)～2月17日(水)
 「遺跡展 愛宕下大名小路の遺跡群(仮)」
 2月19日(金)～4月14日(水)

土曜体験教室

「古代のアクセサリーを作ろう」 10月3日・12月5日・平成22年2月6日(土)

・各事業の詳細は、『広報みなと』または郷土資料館ホームページをご覧になるか、当館までお問い合わせください(連絡先は本頁右下に記してあります)。
 ・当館の刊行物は、ホームページに一覧を掲載し、展示室横の事務室で販売しています。

事業報告 (平成21年3月～平成21年9月)

- ① コーナー展「西国大名の江戸屋敷
—江戸にもたらされた国元の物産—」
平成20年12月13日～4月15日
- ② 土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう」 4月18日・6月13日
- ③ コーナー展「新収蔵資料展」 5月17日～6月15日
- ④ 親子学習会「港区たてものウォッチング」 5月23日・30日
- ⑤ コーナー展「都電—港区の路面電車」 7月1日～開催中
- ⑥ 常設展 一部リニューアル 7月1日～
- ⑦ 古文書教室(全5回) 7月3日・10日・17日・24日・31日
- ⑧ 夏休み体験ミュージアム
「チャレンジ! 縄文時代のアクセサリーを作ろう」 8月5日
- ⑨ 夏休み学習会(東京海洋大学附属水産資料館との連携事業)
『ノリと海苔』～「のり」のこと、もっとよく知る2日間!」
8月19日・20日

展示室より

常設展示の「これが見どころ 見せどころ」は終了しました。7月からは、新たに中央部分で近世から近現代までの江戸・東京、港区に関する歴史資料を展示しています(特別展中を除く)。また、指定文化財をご紹介するコーナーも設けました。壁沿いの常設展示については、従来どおりです。

夏休み期間中の土・日に、拡大・延長していた「さわれる展示室」の開室時間は、9月から平常どおり火・水・金・土曜日の12:30～16:30です。

※ただし、特別展会期中の日曜・祝日は開室。

港区立港郷土資料館の利用案内

交通 JR 田町駅より徒歩5分、都営地下鉄三田駅(A3出口)より徒歩2分
 都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分、港区コミュニティバス(ちいばす)
 「田町駅前」停留所下車徒歩2分、「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間 9:00～17:00 **入場料** 無料

休 館 日 日曜日・祝日・第3木曜日
 年末年始・特別整理期間

※特別展中の休館日は本頁上段をご覧ください。

※特別展前後特別休館

10月13日(火)～10月24日(土)
 11月30日(月)～12月11日(金)



『資料館だより』64号

平成21年(2009)9月30日発行
 編集・発行 港区立港郷土資料館

〒108-0014 東京都港区芝5-28-4
 Tel.03(3452)4966 Fax.03(5476)6369

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>



港区は、環境に関する国際規格 ISO14001 の認証を取得しました。
 港区は、みどりの保全とごみの減量に努めています。
 この印刷物は、古紙を利用した再生紙を使用しています。

刊行物
 発行番号
 21116-7541